

茨城高等学校・中学校

校長室だより 2023年10月27日

みちのく半日ひとり旅

10月の週末、筆者を含む中学の同級生のおじさん8名が、一泊二日で福島県飯坂温泉への旅を敢行することとなりました。彼らとはこれまでも旅行やら忘年会やらを定期的開催していたのですが、コロナ禍で中断をやむなくされ、今回の旅行は数年ぶりのビッグイベントです。しかし、出発日の土曜の午前中、筆者は抜けられない仕事があり、電車で後を追いかけて夕方から合流することにしました。その行程は以下の通りです。

水戸駅 13:15 発——J R 水郡線——郡山駅 16:26 着
郡山駅 16:39 発——J R 東北本線——福島駅 17:25 着
福島駅 17:35 発——福島交通飯坂線——飯坂温泉駅 17:58 着

水郡線に3時間オーバーってマジか？と最初は思いましたが、回り道をして東北新幹線を使うのとトータルの時間はあまり変わりません。それでいて運賃は半額以下です。考えてみれば、これまでも常陸大子までは水郡線を利用したことがありますが、その先は筆者にとって未踏の地です。ここは水郡線利用促進運動への協力もかねて、水郡線コンプリート案を採択することにしました。

13時15分、水郡線は予定どおり水戸駅を発車。うまい具合に座れたので、読みかけの新書を取り出し読みながら北上することにしました。常陸大宮までは線路沿いにちょっとした市街地や小さなビルなども見ることはできましたが、常陸大宮以北はほぼ、田畑と山林とまばらな人家といった光景が続きます。

本を読んで、疲れると2、3分うとうとして、目を開けては水色の秋の空と少し寂しい山村の景色をしばし眺め、この風景はきっと何十年前も前からこのままなのだろうなあ、などととりとめもないことを考え、また本のページを繰る、という何とも穏やかで幸せな時間が流れていきます。常陸大子を過ぎたころには新書を読み終え、次の文庫本にとりかかりました。読む、うたた寝、景色、読む、うたた寝・・・を繰り返すうちに列車は郡山駅に到着しました。

コーヒを買って三口で飲み干し、東北本線福島行き乗り場の4番ホームへ。電車は少し混みあっていましたが、今度も運よく座れました。郡山を出発して間もなく、文庫本も読み終わってしまったので、その後はもっぱら車窓の景色を眺めることに。五百川付近で、西日が雲に隠れ、暗い白銀の光が町を覆うさまを見ました。二本松では、暮れなずむ空にくっきりと稜線を描く安達太良の山影を見ました。

予定時刻より1分遅れて、福島駅に到着。福島駅は駅ビルもあって、都会の大きな駅でした。ここで困ったことに、次に乗り換える飯坂線乗り場の表示が見あたりません。乗り換え時間は10分です。駅員さんに尋ねると、「ここをまっすぐ行って左」と何ともそっけない返事。ひたすらまっすぐ行ったのですが、「左」がどこかわかりません。やや焦って、近くにいたサラリーマン風のおじさんに尋ねると、「あ〜あすこはわんがりづらいがら（福島弁）」と言って、わざわざ飯坂線の改札の見えるところまで案内してくれました。おじさ〜ん、ありがと〜お！

飯坂温泉駅までの切符270円を買い、福島交通が運営する3両編成のかわいらしい列車に乗り込みました。なぜかこれがかかなり混雑しています。しかも中高生から20代くらいの若者の姿がめちゃ多い。はて、近ごろ若者たちの間では飯坂温泉がひそかなブームなのだろうか？などと考えているうちに、終点の飯坂温泉駅が近づいてきました。するとどこからか、にぎやかな太鼓や鉦（かね）の音、お囃子（はやし）の音が聞こえてきます。

人混みに押されて改札を出るとそこでは、むこう縛りの鉢巻きに半被（はっぴ）姿の粋なお兄さんやお姉さんたちが、赤い提灯を連ねて飾った山車（だし）を囲んで「わっしょい！わっしょい！」と盛り上がっているのではないですか。そうです。その日はたまたま飯坂温泉の「けんか祭り」の当日だったのです。

ホテルから迎えに来てくれていたワゴン車の運転手のおじいさんに「はやぐすねど、祭りで道が通れなくなる（福島弁）」とせかさされ、おじいさんの、リュック・ベッソン監督の映画「TAXi」ばりの運転に身をまかせ、温泉街の入り組んだ細い路地を駆け抜け、無事にホテルへと到着しました。ホテルでは、すでに温泉後の一杯でいい感じになっている7人のサムライ・・・ではなく7人のおじさんが待ち構えており、筆者たちは久闊（きゆうかつ）を叙するのもしそこそこに、一気に宴会モードへと突入していったのです。

たった半日でしたが、秋のみちのくの気配を感じた、なかなか楽しいひとり旅でした。



読書ノススメ／我が青春の本棚より

長かった夏が終わりを告げ、ようやく秋がやってきました。芸術の秋、スポーツの秋、食欲の秋、色々な秋がある中で、今回のテーマは「読書の秋」です。

君はひと月にどのくらい本を詠みますか？学習参考書の出版や教育サービスなどを手がける学研が2021年に行った調査では、高校生が1ヶ月に読む本の冊数は平均1.4冊で、高校生の約半数は月に1冊も本を読まない、という結果が示されていました。ちなみに、2018年の同じ調査の平均が2.3冊なので、高校生の読書量は、わずか3年間で月平均1冊近く減少したことになります。

若者の読書離れ、活字離れが問題視されて、すでに10年、20年といった時間が流れています。今やこれは若者だけでなく、若者の頃に読書習慣を持たなかった大人も含めての日本人全体の課題かもしれません。その背景にはさまざまな原因が想定できますが、本以外のメディアやコンテンツの多様化、充実という現実を無視することはできません。YouTubeをはじめとする動画配信サービス、X（旧 Twitter）、InstagramなどのSNSは、スマホさえあれば誰でも気軽に無料で楽しめます。また、NetflixやPrime Videoなどのサブスクのサービスを利用すれば、映画やドラマ、アニメが見放題です。

昔、娘との結婚のゆるしをもらうためにやって来た若者に、娘の父親が「結婚を認めるにあたって、君の部屋の本棚を見せたまえ」と言った、という話を何かで読んだことがあります。本棚には、若者がこれまで読んできた本が収められています。読んできた本は、彼の人間性や考え方を何よりも如実に物語っている、本棚を見れば彼がどんな人間なのかわかる、というわけです。

しかし、さまざまなメディアが存在する現代は、上記のお父さんはどうするのでしょうか。「君のスマホを見せたまえ」とか言われたら、若者はイヤだろうなあ～。

ときどき人から「オススメの本ってありますか？」と聞かれることがあります。筆者にとってもっとも困惑する質問のひとつです。お寿司屋さんだったら「今日はハマチのいいのが入ってるよ！」とか、レストランだったら「本日のオススメは“地中海風オマール海老のトリュフとブラックペッパー香るテルミドール仕立て”でございま～す」みたいに紹介できると思うのですが、本の場合、どんな本を読んで、どんな読書経験を期待しているのかは、人によって違います。筆者の経験からすると、その人からどんな本を読みたいのかを聞いて、それに近い中から筆者が読んで面白いと思った本を紹介したとして、読んだ相手の反応はだいたい微妙です。どんな本を面白いと思うかは人それぞれなので当然と言えば当然なのですが、何となく責任を感じてしまうものです。

ひどいときなど、同僚の先生から「おもしろいミステリー本知らない？」と聞かれて、復讐を誓う主人公が憎い相手をめっちゃめっちゃグロい方法で次々と殺していくという内容の、海外では数々の賞にも輝いたおもしろミステリー本を紹介したところ、しばらくして「えっ、先生っていつもあんな本読んでるの？」と不審者を見る目で見られたこともありました。

筆者が色々な本に興味を持ちはじめたのは、高校生のときです。中学時代、横溝正史バカだった自分に（校長室だより 2022年11月号参照）、世の中にはそれ以外にもたくさん面白い本があるよ、ということを教えてくれたのは、茨城高校の恩師の先生方でした。三島由紀夫、遠藤周作、太宰治、安部公房、ドストエフスキー、トーマス・マン、カミュ、ヘミングウェイ…それまで名前を知っていたかどうかは怪しい作者たちの本を手に取り、ドキドキしながら表紙をめくったのを記憶しています。中には難解で、理解できないまま無理矢理読み切った作品も多々ありますが、自分の知らなかった新しい世界を切り拓いて見せてくれたのも、多くはそうした作品たちでした。

おそらく、青春時代にこのような本との出会いがなかったら、大げさでなく、自分はもっと違う自分だったと思います。少なくとも今のパーソナリティを持った「自分」は存在しなかったように思います。国語の教員になってからは、かつて自分が恩師から教を受けたように、生徒たちに本の面白さを伝えようとしてきましたが、どのくらい伝えられているか自信はありません。

というわけで、今回の「校長室だより」では、筆者が青春時代に読んで心に残っている本、生徒諸君にも読んでほしい、思いを共有したいと思う本を、個人的なエピソードもまじえて紹介していきます。あくまで「個人的に好きな本」なので、お薦め本とは少し違うかもしれませんが、興味を持った人は手に取ってみてください。

『星々の悲しみ』 宮本 輝

1965年、18歳の「ぼく」は、大学受験に失敗し浪人することになります。しかし、猛勉強しようと考えていた矢先の4月、「ぼく」はふと立ち寄った図書館で、トルストイを読む美しい女子大学生に一目惚れし、予備校に通うのをやめ、府立図書館の棚にある外国の古い小説二百数十冊を全部読み切ることを決意してしまいます。図書館で本を読みあさる日々を送っていたある日、「ぼく」は同じ予備校に通う有吉、草間と友達になります。

「同性のぼくでさえ一瞬はっとするくらい彫りの深い秀麗な顔立ち」の有吉と、漫画の三枚目のような顔つきの草間は、ともに「ぼく」とは同学年の医大進学を目指す浪人生で、なぜか馬が合いいつも一緒にいます。

出会ったその日に、三人は喫茶店「じゃこう」に立ち寄るのですが、その入り口には大きな油絵が飾られていました。葉の繁った大木の下、麦わら帽子を顔に乗せた少年が一人眠っている、傍らに自転車が停めてあり初夏の昼下がりの陽光がまわりを照らしている、というその絵には「星々の悲しみ」という題名が記されています。「ぼく」はなぜその絵の題名が「星々の悲しみ」なのか不思議に思います。絵には、作者の嶋崎久雄が二十歳で亡くなったことも記されていました。

怪盗ルパンのように何でも盗んでしまう特技を持つという草間に、それなら図書館で会った女子大生とあの油絵を盗んでくれと冗談を言って「ぼく」と有吉は大笑します。そして、有吉と草間が一足早く店を出た後、会計をすませた「ぼく」が入り口の壁に目をやると、そこにあった「星々の悲しみ」は忽然と消え失せていたのです。

盗み出された「星々の悲しみ」は、三人の手で小さな文具店を営む「ぼく」の家の二階の四畳半に運び込まれます。そこで「ぼく」の高校2年生の妹、加奈子と会った草間は、

「前歯がびよこんと大きくて、うさぎちゃんみたいやなァ」と「ぼく」と友達になった幸運を喜びます。草間は加奈子に恋をし、加奈子は有吉に恋をします。有吉と草間は、その後もたびたび「ぼく」の家を訪れるようになるのですが、ある日、有吉が帰り際に加奈子の掌になにか紙切れを握らせるのを目にし、「ぼく」は有吉に「不思議な憎しみ」を抱くのでした。

『星々の悲しみ』の文庫化は1984年とあることから、小説はほぼ文庫本で読むことにしている筆者がこの作品に出会ったのは、大学生の時だと思います。どうしてこの本を手にとったのか、そのあたりの事情もまったく覚えていませんが、おそらく『星々の悲しみ』という題名に惹かれてのことでしょう。主人公の「ぼく」は、1965年生まれ筆者よりも18歳年上ということになります。今読み返してみても、自分よりもひと世代前の青春を生きた若者たちの物語が、古い映画音楽のノスタルジックでせつない旋律のように胸に響いてきます。

その夜、部屋で「星々の悲しみ」にひとり見入っていた「ぼく」に、加奈子はこの絵は“悲愴”な絵だ、と告げます。「悲愴よ。可哀そうよ。この人、木の下で死んでいるんでしょう？」お前の頭はせいぜいその程度や、アホ、と散々「ぼく」に馬鹿にされても、加奈子の意見は変わりません。「私、やっぱり、自分の死んでいる姿を描いたんやて思うなァ、この嶋崎久雄って人は」

それまでもしばしば腰のだるさをうったえていた有吉が、9月に入って腰の病気で入院したと「ぼく」は草間から知らされます。「ぼく」と草間は何度か有吉を見舞いますが、病状は快方にむかいません。11月の夕方、ひとりで有吉を見舞った「ぼく」は、やせ衰え、腹だけが異様に膨れた有吉の姿に、その病状が尋常でないことを悟ります。「草間のやつ、俺の妹に気があるんやけど、妹はお前のことが好きなんや」という「ぼく」のことばに、唐突に有吉は「…俺は、犬猫以下の人間や」と応えます。驚く「ぼく」に有吉は、「またな」と言って笑います。有吉が末期の癌で死んだのは、その二十日後のことでした。

新聞に「消えた幻の名画」というコラムが載り、「ぼく」は「星々の悲しみ」を返すことを決意します。渋る加奈子を小遣いで釣って手伝わせ、まだ人々が眠っている寒い冬の早朝、「星々の悲しみ」は数ヶ月ぶりに「じゃこう」に戻ります。いつかの晩、有吉が加奈子に手渡した紙切れには、「草間は佳奈ちゃんに夢中です。どうやら本気みたいです」と書かれていたことが加奈子の口から明らかになります。絵を無事に返し終えた「ぼく」は、有吉の「またな」という最後の言葉を思い返すのでした。

「俺は犬猫以下の人間や」。今までに『星々の悲しみ』を何度読み返したかしれませんが、この有吉のことばの意味が筆者にはいまだにわかりません。ネットなどには、その意味をさまざまに解説している文章が散見されますが、腑に落ちる解答にはまだ出会っていません。こんな激しいことばに続けて、なぜ有吉は「またな」と言って笑ったのか、嶋崎久雄は、夏の昼下がりののどかな午睡を描いた絵に、なぜ「星々の悲しみ」と題名をつけたのか、「星々の悲しみ」を見た加奈子が、「この人、木の下で死んでいる」と感じたのはどうしてか……。実は『星々の悲しみ』という小説は、いくつもの謎をはらみ、その答

えが示されないまま放置されている作品なのだと思います。

今、この文章を書いている、「わかる」には二つの意味があるのではないかと、思いつきました。一つは論理的に判断できるという意味、もう一つは、なぜか説明はできないが心の深いところで理解できるという意味です。二つ目の「わかる」は、共感に近いかもしれませんが、それよりもっと深いところで対象と結びつく感覚です。筆者にとって『星々の悲しみ』は、後者の「わかる」に属する小説なのだと思います。

「青春の本棚」という今回のテーマを思いついたとき、真っ先に浮かんだ作品が『星々の悲しみ』でした。60ページそこそこの短編です。中学生も楽しく読めると思います。

『異邦人』 カミュ

「きょうママンが死んだ」という短い一文で始まるこの小説は、無名だった仏領アルジェリア生まれの27歳の小説家、アルベール・カミュの名を一躍有名にしました。年譜によれば、カミュが『異邦人』を書き上げたのは1940年とあります。小説は、勤め人「ムルソー」の一人称形式で語られていきます。

母の死の知らせを受け取ったムルソーは、葬儀に出席するため、二日間の休みを取り、アルジェから80キロ離れた養老院へとバスで向かいます。養老院に着いたムルソーは、お母さんをご覧になりたいでしょうから、と柩（ひつぎ）のふたを開けようとした門衛に、その必要はないと伝えます。「なぜ」といぶかる門衛に、ムルソーは、理由はないと答えます。そして、白熱灯のきらめく光にひどく疲れを感じつつ、老人たちと母の通夜を過ごし、灼熱の太陽に気が遠くなりながら教会へ向かう葬列の歩みに加わり、血のような色をした土の中に母の柩を埋葬します。

ムルソーは、不思議な男です。母の死の知らせからその葬儀までの十数ページの中に、母の死を悼むムルソーの言葉や心情はひと言も書かれていません。彼の周囲では淡々と時が流れ、その思いは、ミルクコーヒーや、煙草の煙や、老人たちの顔つきや所作、夜と花のにおい、丘を越えて風が運んでくる潮の香りなどに転々と移ろいます。しかし、考えてみると、人とはそういったものなのかもしれません。私たちには、どんな状況におかれても、日常を手放さず、ひたすら日常の中にあり続けようとする習性があるのかもしれません。葬儀を終え、無事、アルジェに帰着したムルソーは心に喜びを感じます。

葬儀の翌日、ムルソーは海に泳ぎに出かけ、もと事務所のタイピストだったマリイと再会します。二人は海水浴を楽しみ、夜は喜劇映画を観に行き、接吻し、ムルソーの部屋で朝を迎えます。マリイが帰ったあと、ムルソーはバルコニーで道行く人々を眺めながら日曜日を過ごし、母は埋葬され、自分は明日から勤めに戻る、結局何も変わったことはなかったのだ、と考えるのです。

同じアパートに住むレエモンという自称“倉庫係”の男から、ムルソーは手紙の代筆を依頼されます。レエモンは実はやくざ者で、自分を裏切った女を呼び出して懲らしめるため、うその手紙を書いてほしいというのです。ムルソーは承諾し、その数日後、レエモンの部屋から激しいいさかいの物音が聞こえてきます。レエモンが女を殴っていたのです。巡査が呼ばれ、騒ぎは一旦おさまりますが、レエモンの身边には、彼が殴った情婦の兄を

メンバーに含むアラビア人の男たちがつきまとうようになります。

ムルソーとマリイはレエモンに誘われ、彼と彼の友人夫妻とで海辺のヴィラで休日を過ごすこととなります。ところが、ムルソーたちは浜辺でアラビア人の一団と遭遇し、殴り合いになります。レエモンは匕首（あいくち 注：つばのない短剣）で切られ怪我を負います。ムルソーはふとしたことから、レエモンのピストルを預かります。

午後、ムルソーは1人で再び砂浜を散策し、泉のそばでくつろぐ先ほどのアラビア人の1人と鉢合わせします。男は、ムルソーを見ると体を起こし、ポケットに手を入れます。自分が回れ右をしさえすれば事は終わるとわかっている、「灼熱の太陽の光に打ち震える砂浜」が、ムルソーにそうさせません。「私はそれがばかげたことだと知っていたし、一歩体をうつしたところで、太陽からののがれられないことも、わかっていた」としながらも、ムルソーは一歩前に踏み出します。それを見て匕首を抜いて構えた男にむけて、太陽がもたらすめまいの中、ムルソーの手の中のピストルが轟音を発します。ムルソーは身動きしない男の体に、さらに4発の弾丸を撃ち込んだのでした。

筆者が『異邦人』を読んだのは、高校1年の夏ではなかったかと思います。今はなくなってしまった泉町の川又書店で、書棚にある『異邦人』のタイトルを目にして、迷わず購入しました。当時の自分が、小説『異邦人』やカミュについて何かを知っていたわけではありません。それでは筆者に『異邦人』を手にとらせたものは何でしょうか。

筆者が中学生の時、シンガーソングライターの久保田早紀さんが歌う「異邦人」が大ヒットしました。エキゾチックなメロディーにのせて「子どもたちが空に向かい、両手をひろげ・・・」と歌う曲を聞いたことがある人もいるでしょう。筆者は、テレビの歌番組で久保田早紀さんをひと目見て、恋に落ちました。知的でどこか神秘的な美貌と、はかなげな表情、すこしハスキー気味の澄んだ歌声も含め、こんなにきれいで魅力的な女性が現実存在するのか、と思いました。この中2病的こじらせ恋愛感情は、高校生になっても筆者の胸の中にくすぶり続け、筆者を小説『異邦人』へと導くことになったのです。

本との出会いのきっかけなど、こんなたわいもないことなのかもしれません。しかし、こうしたいきさつで出会った『異邦人』は、筆者を夢中にさせました。作品にちりばめられた、人間の真実を容赦なくめぐり出す問い、詩のことばを思わせるような叙情、ムルソーという謎めいた人物に属する虚無と明晰は、かつて読んだどの小説とも似ていないと感じました。『異邦人』は二十世紀フランス近代思想の萌芽と位置づけられることもある作品ですが、そんなことはつゆ知らない高校生にも、作品のもつエネルギーは脈々と伝わってきたのかもしれません。小説の面白さを教えてくれた作品、新しい知の世界を垣間見せてくれた作品として、黄ばんで古びた新潮文庫の『異邦人』は、今でも筆者の部屋の本棚の隅にあります。

殺人の罪で逮捕されたムルソーは、判事から尋問を受けます。しかし、判事には、罪に対する悔恨も示さず、神の救いも求めないムルソーが理解できません。事件から一年後の夏、ムルソーの裁判が始まります。検事は、ムルソーが犯した殺人の罪についてのみならず、母の葬儀の前後のムルソーの行動を問題にします。柩の母に最後の別れを告げようともせず、葬儀の翌日には海水浴に出かけ、女性と関係を持ち、喜劇映画を楽しんだムルソ

一の心は空洞であり、「人間の心を守る道徳原理は受け入れられなかった」と非難します。裁判長から殺人の動機を問われ、ムルソーは「太陽のせいだ」と答えます。審問が終了し、夕暮れ時に再開された法廷で陪審員たちの答申が読み上げられ、裁判長はムルソーに死刑を宣告するのです。

『異邦人』は不条理を追求した作品と言われます。ムルソーの言動は、常識的な論理性を逸脱しているように見えますが、ムルソー固有の論理性を有しているとも言えます。ちなみに『異邦人』の作品中には、「不条理」という言葉は一切使われていません。

読んだことのない生徒諸君には一読を勧めます。高校生はぜひ、中学生もがんばればいけます。

『金閣寺』 三島 由紀夫

大学生の頃、友人と、好きな小説家について、三島由紀夫派か太宰治派かという話をよくしていました。両者とも若い年代の読者に人気があり、作家として活動していた時期も近く、比較されることの多い作家です。

太宰のファンに言わせると、彼の作品を読んでいると、ああ、太宰は私と同じだ、太宰を理解できるのは私しかいない、というように思えてくるそうです。残念ながら筆者はついぞそのような経験はありません。太宰を読むと、なぜかお腹をこわすという特異体質もあって、筆者は三島派でした。数ある三島作品の中で、一番好きな作品は？と尋ねられたら、今でも迷わず『金閣寺』と答えると思います。

1950年（昭和25年）夏、京都北山を代表する名刹（めいさつ）、鹿苑寺の金閣が焼失しました。原因は、寺僧による放火でした。その六年後、この事件をモチーフに書かれたのが小説『金閣寺』です。

京都府舞鶴の東北、日本海に面したうらさびしい岬の寺に生をうけた「私」は、父から金閣の美しさを語り聞かされて育ちます。金閣ほど美しいものは地上にない、という父のことばに、「私」はまだ見ぬ金閣に、この世ならぬ美を想像します。「私」は生来の吃音（きつおん 注：どもり）でした。悪童たちは私の吃音をからかい、吃音は私と外界を隔てる障壁となります。「私」が言葉を、その最初の音を発しようと悪戦苦闘する間に、外界の現実には新鮮さを失ってしまうのでした。

成長した「私」は、舞鶴郊外の叔父の家に預けられ中学に通うこととなります。その隣家に有為子という美しい娘がいました。有為子への思いをつのらせた「私」は、夏の朝早く、看護婦として舞鶴海軍病院に通勤する有為子の自転車を待ち伏せます。やがて暁暗の中、自転車の灯りが近づき、自転車の前に飛び出した「私」に気づいた有為子は急停車します。その瞬間、私は石と化してしまいます。意志も欲望もすべてが石と化し、私の口は無意味にうごめくばかりで言葉を発することができません。「何よ。へんな真似をして。吃りのくせに」有為子は事件を母親に告げ口し、その晩、彼女の母親が叔父の家にやってきます。日ごろ温和な叔父からひどく叱責された「私」は、有為子の死を願います。「私」の恥の証人が消え去ってくれることを願ったのです。

その二十日後、「私」の村に脱走兵が逃げ込んできます。彼は海軍病院で有為子と恋仲となり、妊娠して病院を追い出された有為子を追って軍を脱走してきたのでした。脱走兵

に弁当を届けようとした有為子は、憲兵に捕まり尋問を受け、ついに脱走兵の居場所を告白してしまいます。脱走兵は山寺の本堂に身を潜めていました。「私」は「裏切ることによって、とうとう彼女は、俺をも受け容れたんだ。彼女は今こそ俺のものなんだ」と想像します。憲兵たちは、有為子をおとりに本堂に向かわせ、姿を現した脱走兵と憲兵の間で銃撃戦が起こります。脱走兵は逃げようとする有為子の背に銃弾を発射し、その直後、拳銃を自分のこめかみに当てて引き金を引きます。「私」の願いは成就します。それからというもの、「私」は金閣の美しさを思い浮かべるとき、有為子の面影を重ねるようになります。

これは、『金閣寺』を象徴するような冒頭のエピソードです。「私」は劣等感の塊のような少年です。体が弱く、駆け足や鉄棒も苦手、なによりも生来の吃音が外界との障壁となり、いつしか人に理解されないことが「私」にとっての唯一の誇りとなります。

高校生の筆者が『金閣寺』を読んで最初に感じたのは、コンプレックス、劣等感にまみれて生きる「私」へのシンパシーではなかったかと思います。吃音こそなかったものの、当時、筆者には数多くのコンプレックスがありました。容姿に関すること、学業に関すること、恋愛に関すること、その他もろもろです。この劣等感は時として、ふと、おごりや優越感に変わることがあります。しかし、このような安易な優越感は長続きしません。日常の小さなできごとをきっかけにもろくも崩れ、再びどんよりとした劣等感が生じるのです。もちろん、青春時代でなくてもこうした心の現象はありうるわけですが、特に青春時代にはその振幅がより大きいように感じます。

今まさに10代を生きる生徒諸君の中にも、筆者と同じような覚えのある人が少なくないのではないのでしょうか。自我が急速に成長し、自分の生きる世界が広がり、自分を客観化する機会も多くなる青春時代、人はさまざまなギャップを経験します。大人と子どものギャップ、他者と自己のギャップ、理想の自分と現実の自分のギャップ、さまざまなギャップの中でコンプレックスや劣等感は肥大します。

誰の心にも等しく潜むコンプレックスや劣等感、その裏返しの倨傲（きょごう）や不遜（ふそん）を、『金閣寺』は赤裸々に、精緻（せいち）に描き出すのです。

翌年の春休み、「私」をともない金閣へ行くため、叔父の家を訪れた父の姿に「私」は驚愕します。父は結核を患い、病み衰えていました。かつて金閣寺で修行し、住職とも友人であった父は、自分が存命のうちに、息子に金閣を見せ、また、住職に息子の将来を託すつもりだったのです。

初めて目にした現実の金閣は、「私」を落胆させます。古く黒ずんだちっぽけな三階建ての建物は、「私」に何の感動ももたらしませんでした。「私」は「金閣がその美をいつわって、何か別のものに化けているのではないか」と疑います。父と再会した住職は、息子の行く末を、という父の願いを快く引き受けます。父子は金閣にいとまを告げ、父は岬の寺へと帰っていきます。

あれほど失望を与えた金閣は、日が経つにつれ私の心の中で美しさを蘇らせていきます。そして、いつか、見る前よりももっと美しい金閣となっていきます。「地上で最も美しいものは金閣だと、お父さんが言われたのは本当です」と、「私」は父に手紙を書きます。

本文、「読書ノススメ／我が青春の本棚より」ですが、当初の予定では4～5ページでまとめるつもりが、またまた大長編となってしまいました。反省。

読書には、気晴らしとする読書と、自分の心を露わにして、真剣にする読書があると思います。気晴らしの読書も悪くはないですが、心や知性がもっとも成長する青春時代に、真剣に本と向き合う経験はとても貴重だと思います。そうして読んだ一冊、一冊の本は、君の心のどこかに収まり、君という人格、個性を形づくっていきます。

せっかくの秋の夜長、たまにはスマホを脇に置いて、好きな本とじっくり語り合ってみるのもよいのではないのでしょうか？

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。